

# 茶の湯 文化学会 会報

第112号 / 2022年3月28日  
発行 茶の湯文化学会  
京都市左京区下鴨森本町15  
生産開発科学研究所内  
〒606-0805  
TEL 075-702-9270  
FAX 075-702-9314  
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp  
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

No.112

## 千代能の桶

たとえば月明かりのもと、中国元時代の興福寺銀欄を眺めたと想像する時、薄明かりの中でみる紫地の裂は人の心を吸い込ませる深さがあり、僅かな部分でしかないものの、かつて興福寺の荘厳となっていた伝承を想起させる。優れた一部分は全体を雄弁に物語る。そして小さくとも力のある作品は大きい。

このことは過去の茶人についてもいえる。著名な茶人については資料の豊富さから研究が進んでいるものの、やはり資料の不足から研究が進まない知られざる茶人が多い。これらの知られざる茶人たちもまた重要な意味を持つ。

このように考えるきっかけとなったのが新発田藩十代藩主溝口翠濤であった。不昧の没後の江戸で、不昧の近くにあった吉村観阿

や本屋惣吉親子などは、新たな出入り先が溝口家であった。ただ翠濤が親しくし、重用したのは観阿であった。確かに不昧は偉大である。ただ別の視点からいえば不昧のもとに出入りした道具商からみた不昧は、顧客の一人。俗にいう太い客である。不昧が没したとき、道具商は新たな太い客筋を探すこととなる。観阿の場合は溝口家に注目した。溝口家は資料が豊富に残ることと、蔵帳も確認できたことで、文献と作品の追跡調査が可能となり、より立体的に溝口家の茶の湯について知ることができた。そして何より溝口家に集う観阿や本屋惣吉親子などの人々が、実は不昧没後の江戸の茶の湯文化に大きく関係する人々なのである。

このような翠濤周辺の人で数寄

## 宮武慶之

者では鳥羽屋道樹がいる。現在、野村美術館が所蔵する中興名物茶入銘「藻塩」には多くの添状が付属することが知られている。そのうち寿星軒の名が確認できるが、この人物こそが道樹である。道樹は江戸三十間堀の町人数寄者である。幸い、弘前藩の藩庁日記に記録が残り、致富と茶の湯の活動について知ることができた。そして出入りした道具商は、やはり不昧の茶会記にも参会が確認できる竹本屋五兵衛である。竹本屋五兵衛の名は川上不白の茶会記に父孤雲と参会していることが確認できるほか、近世絵画史では『古画備考』で英一蝶と祖父五兵衛との関係が口述している。

このように考えると時代の大きな変革期に美術品が移動すると同時に、その活動には美術商が介在

することがわかる。もちろん個人間の取引もあるため全てとはいわないが、しかし相応の金額と目利きを必要とするため、名品ほど個人の範疇を超える場合がほとんどではなからうか。水を張った桶の底が抜けたとき千代能は悟りを開いたが、これがもし数多の名物道具であったなら、新たな所蔵者のもとで道具として生かされ、茶の湯の歴史を紡ぐこととなる。

時代の変革期も含め美術品移動で注目できる時期は近代を除けば、江戸時代を通して正徳期と寛政期の前後が最も話題に富む。

一点目は正徳四年の銀座役人闕所による公売。最近の『茶の湯文化学（三十六号）』で和田千春氏は『正徳四年道具代価帳』（慶應義塾図書館蔵）について研究されたのが記憶に新しい。本資料は琳派の研究ではしばしば引用される。中でも筆者が本資料で注目した点は、「片輪車蒔絵螺鈿手箱」（国宝。東京国立博物館蔵）、千歳蒔

絵硯箱銘「君が千歳」（藤田美術館蔵）、「若狭盆」が一旦は公売に付されたものの、その後は二条城の蔵にしばらく保管されたという点である。筆者は誠に偶然ながら、松平伊賀守家の蔵帳を確認することができ、「片輪車蒔絵螺鈿手箱」と千歳蒔絵硯箱銘「君が千歳」に関して、「御拝領」との記述が目に見えび込んできた。そして伊賀守家の資料により松平忠周が所司代であったとき、吉宗から内々に拝領していることが確認できた。吉宗が茶の湯道具を下賜したと聞けば直ちに、表千家六代寛々斎と唐津焼茶碗銘「桑原」の関係が想起されるが、伊賀守への優れた作品の下賜は信任の厚さとも重なる。幸い、「片輪車蒔絵螺鈿手箱」を問近に拝見することができ、内側の細部や片輪車と波間の蒔絵の効果なども含め、鎌倉時代の蒔絵の奥深さに改めて感動した記憶がある。

二点目は寛政期前後の冬木屋上

田家。従来、冬木家と表記されるが江戸時代を通じての同家の屋号は冬木屋という材木商であり、上田氏を名乗る。ただ現在の冬木家当主の教示によれば、明治維新に際して上田氏から冬木氏に改姓したという。そのため江戸時代を通じて同家の活動を表記する場合は冬木屋上田家が正確である。さて不昧は多くのコレクションを形成

闕所道具の公売の落札者、および冬木屋道具を不昧らに取り次いだのは、道具商であったという点で共通している。作品移動が研究の主眼ではなく、あくまでその後の所蔵者への影響が重要となる。これらの時期の見えざる交流が、実は移動にひそむ人間関係にあることを如実に表しているのが特色といえよう。

したが、そのうち冬木屋旧蔵品は多い。例えば唐物肩衝茶入銘「油屋」（重文。崑山記念館蔵）、千利休作竹花入銘「園城寺」（東京国立博物館蔵）、唐物肩衝茶入銘「富士山」（湯木美術館蔵）などがある。ただしこれらは本家喜平次、分家小平次の所蔵品もほぼ同時期に流出しているために混合されがちであるが不昧をはじめ酒井宗雅、柳澤堯山などに移動している。

ところで最近、次のような話を聞いた。知人が猫をもらって欲しいとさる方に相談したところ、「タクシーに猫一匹だけに乗せて、来させなさい」とやりわり断ったそう。例え桶であっても、桶だけがタクシーでやってくるわけではない。相応の人物がふさわしい新たな所蔵者のもとへ相応の値段で運んでくることは、やはり不変だ。優れた作品が優れた所蔵者を互いに選ぶという関係は時代を超えて通じている。

以上の二つの時期の移動は、茶の湯文化に関係する著名な人々と社会的な環境を考える上でも多くの話題を提供してくれる。そして

## 理事会

令和三年度第二回理事会が、十月十二日（日）午後二時より

Zoomミーティングで行われた。理事十二名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

一、中村修也会長退会について  
二、会長候補者選考委員会の編成について

三、令和三年度大会の報告  
四、令和四年度総会・大会について

五、各担当理事より事業報告  
六、会誌・会報について  
七、その他、

第一議題では、中村修也会長退会についての報告があった。中村修也氏から、令和三年度の大合終了後の九月二十五日付、両副会長と事務局宛メールにて、茶の湯文化学会を退会する、との申し出があった。慰留に努めたが、ご意志が堅かったので、議題とし退会を

確認・了承された。

来る令和四年度の総会にて新会長が選出されるまでは、両副会長が会務を代行することが了承された。

第二議題では、会長候補者選出に関する内規に従い、新会長候補者の選考を行うよう、会長候補者選考委員会委員に、田中秀隆理事、船富美子理事、中村幸理事が選出された。次回理事会までに委員会を開催し、会長候補者を選出し、総会にて決定することが決まった。

第三議題では、九月二十五日（土）にZoomにて開催された令和三年度大会の報告がされた。また、会報百十一号の巻頭文にて、矢野副会長が大会の詳しい報告をされたことが紹介された。第四議題では、令和四年度総会・大会について実施することが提案され、承認された。日程：令和四年六月四日（土）・

五（日）

場 所：京都

テーマ：「わび茶の生成 珠光から利休へ」

見学会：未定（コロナの状況を見極めながら、時期を見て

決定）  
懇親会：未定（コロナの状況を見極めながら、時期を見て決定）

シンポジウムは、テーマに沿って、大橋良介（日独文化研究所所長）、熊倉功夫（NHIO Museum館長）等に依頼することが了承された。

また、令和四年度大会実行委員会を立ち上げ、矢野副会長・山田副会長を中心とし、幹事も参加していただくことが了承された。次回理事会にて、概要を報告することとなった。第五議題では、令和三年度各地例会の事業報告について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

東京例会担当の依田理事より、

Zoom開催の方が参加者が多く、遠方からの参加者もあり、今後Zoom開催の受容が高まってくるのではないかと報告があった。

第六議題では、会誌について、山田編集委員長より会誌三十七号の進捗状況が報告され、令和四年三月末に予定通り発行されるとの報告があった。

会報について、船富編集委員長より会報百十一号が制作中で十二月末に発行予定であることが報告された。

第七議題では、次回令和三年度第三回理事会は、令和四年二月十九日（土）午後二時～Zoom開催と決まった。

◇ ◇ ◇

令和三年度第三回理事会が、二月十九日（土）午後二時よりZoomミーティングで行われた。理事十三名、幹事六名が出席

し、以下の議題について討議がなされた。

一、令和四年度総会提出議案について

・令和三年度事業報告、決算報告

二、会長候補者選考委員会からの報告

三、令和四年度総会・大会について

四、会誌・会報について

五、その他  
第一議題では、令和四年度総会提出議案として、令和三年度事業報告、決算報告について、各担当理事より報告と説明が行われ、承認された。その中で、令和三年度予算案を一般会計と大会会計が別に予算立てしたことに關して、令和二年以前のように一般会計の中に大会費を組み込むよう提案され、修正されることとなった。引き続き令和四年度事業案、予算案が提出された。

第二議題では、会長候補者選出に關する内規に従い、会長候補者選考委員会委員から、現在副会長であり、「茶の湯」の無形文化財指定へのワーキンググループの座長でもある矢野環副会長を新会長候補者として選出したことが報告された。理事会では、委員会の報告にもとづいて総会に提案することが決まった。

第三議題では、令和四年度総会・大会について実施することが提案され、承認された。

日程…令和四年六月四日(土)・五日(日)

場所…京都

テーマ…「わび茶の生成 珠光から

利休へ―珠光生誕六〇〇年、利休生誕五〇〇年―

見学会…未定(コロナの状況を見て

極めながら、時期を見て

決定)

懇親会…未定(コロナの状況を見て

極めながら、時期を見て

決定)

シンポジウムは、テーマに沿って、大橋良介(日独文化研究所所長)、熊倉功夫参与(MIHO Museum館長)、田中秀隆理事(大日本茶道学会 公益法人 三徳庵)、総合司会として美濃部仁理事に依頼することが了承された。

第四議題では、会誌について、山田編集委員長より会誌三十七号の進捗状況が報告され、令和四年三月末に発行予定であるとの報告があった。

会報について、飯島編集委員長より会報百十二号が制作中で三月末に発行予定であることが報告された。

第五議題では、「茶の湯」の無形文化財指定に向けて、矢野環副会長を中心にさらに進めていくことが了承された。

## 例会

### 東京例会

(令和三年十二月四日)

「備前焼の皿・鉢」

下村奈穂子

備前国伊部周辺(現在の岡山県備前市)で、無釉の焼き締め陶である備前焼の生産が始まったのは十二世紀末期とされる。当初は壺・甕・播鉢を主製品とし、また遅くとも十六世紀初頭には建水・水指などの茶道具の生産を始めた。本発表では、そのうち、供膳具(食器)である皿・鉢を取り上げた。

備前窯で皿・鉢の生産が始まったのは、天正年間(一五七三〜九二)頃である。天正期の遺跡より、口径二〇〜四五センチメートル、高台がない無文の丸皿・丸鉢が出土することから明らかになる。また、文献資料では、『神屋宗湛日記献立』の天正十五年二月九日条で「備前皿」と記されているのが



初出である。そして、慶長年間（一

五九六〜一六一五）に入ると、四角形や木瓜形を成した漆器・木器の模倣品を生産し、さらに元和年間（一六一五〜二四）に至ると、

茶の湯で人気の高い「牡丹餅（別個体を乗せて焼成することで、その部分だけ別の色を呈する窯変の一種）」があらわれた。牡丹餅は、

備前焼固有の窯変であるが、焼成によるムラや焦げを景色として楽しむという独特の美的感覚によって生み出されたと思われる。反鉢

（半月形）、洲浜形鉢、手鉢、額皿、透文鉢などの器形で汎用された。しかし、寛永年間（一六二四〜四

四）以降は肥前磁器を写した「伊部手」（鉄分が焼成によって溶け、黒や茶褐色に呈し、器面が施釉陶のように光沢を放つ備前焼）に移

行し、その後、徐々に備前窯での皿・鉢の生産は衰退していく。本発表では、十六〜十七世紀の備前焼の皿・鉢の展開を明らかにし、また、それが茶の湯に深く関

わることを指摘した。

## 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。

### 東京例会

令和四年四月二十三日（土）

午後二時〜

（会場・埼玉会館3C会議室）

「近世中期における光悦茶碗の受容過程」

讚井瑞祥

「称名寺聖教に見える茶（仮）」

張名揚

令和四年七月二日（土）

午後二時〜

（会場・未定）

「益田克徳の茶とその周辺 その三」

八木京子・神保乃倫子

「小浜藩主酒井忠義の茶道具蒐集」

依田徹

令和四年九月二十四日（土）

午後二時〜

（会場・未定）

「備前肩衝茶入「布袋」の賞玩と伝承」

荒井欧太郎

「サントリー美術館蔵《三彩鉢》

に見る木米陶芸の特徴（仮）」

安河内幸絵

令和四年十二月三日（土）（仮）

午後二時〜

（会場・未定）

「益田克徳の茶とその周辺 その四」

八木京子・神保乃倫子

「続き薄茶について（仮）」

岡本浩一

令和五年二月十一日（土）

午後二時〜

（Zoom開催）

「松平不昧の新しい道具づくりについて―小林如泥の指物作品調査から―」

倉澤佑佳

「高橋箒庵―『大正名器鑑』を中心に―」

齋藤康彦

静岡例会

令和四年五月上旬

令和四年十一月上旬

東海例会

午後二時〜三時半

（開場午後一時半〜）

（会場・昭和美術館会議室）

令和四年四月二日（土）

「畠山即翁と数寄者の交友」

降矢哲男

令和四年六月二十五日（土）

「楽焼（仮）」

神崎かず子

令和四年九月二十四日(土)

「名物(仮)」

加藤祥平

令和五年三月(日未定)

午後一時～

(会場：未定)

「茶の湯と社会的意義／地域への

影響(仮)」

伊東 梢

稲垣信斎

「茶の湯関係文献を読み所感の発

表」

岡倉天心『茶の本』第7章輪読

(各自お持ちの本をご持参くださ

い)

茶 事 正午～午後四時

席主 四名

会費 五千円

## お知らせ

令和四年度

総会・大会のご案内

令和四年度総会・大会を左記の

日程で計画中です。詳細は令和四

年四月に郵送・ホームページにて

ご案内いたします。

日程：令和四年六月四日(土)

場所：京都

テーマ：「わび茶の生成 珠光から

利休へー珠光生誕六〇〇

年、利休生誕五〇〇年」

懇親会：未定(コロナの状況を見

極めながら、時期を見て

決定)

## 新刊紹介

『お茶と権力 信長・利休・秀吉』

田中仙堂著 文藝春秋 定価九三

五円(税込)

日程：令和四年六月五日(日)

見学会：未定(コロナの状況を見

極めながら、時期を見て

決定)

令和四年十月三十日(日)

午後一時～

(会場：未定)

「名物茶入れの履歴書(仮)」

木塚久仁子

「指物と吉田家」

稲垣信斎

高知例会

金沢例会

令和四年五月二十九日(日)

午後一時～

(会場：金沢 IT ビジネスプラザ

武蔵)

「千利休のやきもの革命(仮)」

竹内順一

令和四年九月十八日(日)

午前十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵

茶室)

「茶の湯文化学会二〇二二年度大

会の研究発表をテーマとしたシン

ポジウム」

発表者 未定

軽食茶事 正午～午後四時

席主 三名

会費 千円

令和四年十二月十一日(日)

午前十時～正午

令和四年十月三十日(日)

午後一時～

令和四年日時未定

移動例会 高山方面

午前十時～正午

午後一時～

令和四年日時未定

移動例会 高山方面

午前十時～正午

午後十時～正午

令和四年日時未定

移動例会 高山方面

午前十時～正午

午後一時～

令和四年日時未定